

「楽しみだねえ！」

そう言う和弥の顔はちよつといたずらっぽい。学園祭の前日、午後の授業が切り上げられ、学校中が明日を待ちきれないかのように身もだえしている。隣のクラスからはしきりに金槌を打つ音が聞こえ、窓の下の中庭からは、明日の発表の迫り込みだろうか、ダンス部のステップがポップスに乗って響いた。

私のクラスでは仮装喫茶をする。そのための教室レイアウトもあらかじめ済んだ。後はテーブルクロスや紙食器を運び込めば、一通りの体裁は仕上がる。明日にはクレープを焼いたりインスタントコーヒーを出したりと、学園祭らしい風景が見られるだろう。

「満、どんなふうになってるかなあ！」

私は横目で和弥のほうを見た。私は和弥と満で三人組を作り、お互いを着せかえた。背の小さい和弥に満が着せたのは、ゲームキャラクターのネズミの着ぐるみだ。黄色のフードから見える、褐色に焼けた肌に汗が伝う。梅雨を過ぎた季節には随分と過ぎた代物だが、和弥はそんなことそっちのけで廊下に期待のまなざしを向けている。

私は視線を廊下に戻す。女子しかない教室の、ほぼすべての視線が廊下へと注がれる。男子は今ちようど階下の更衣室で、衣装の初お披露目の準備中だろう。

満と一緒に、下校道を隣り合って歩き、たびたび寄り道するのもすっかり慣れてしまった。ゲームキャラの着ぐるみに最初に袖を通したのは和弥ではない。満とふたりで、和弥の衣装を買うためにコスプレショップに立ち寄ったとき、私も満の衣装を決めた。そのまま満の部屋に行き、私が着ぐるみを、満は私が選んだ衣装を身に付けた。着替えを待っているとき、満の部屋の扉に背中を付けて座り込むと、もどかしい浮遊感が湧いてきた。

あの男子達のことだから、恥ずかしがつてきつとひとりずつは来ない。徒党を組んでやってくるんだろう。廊下を歩く女装集団に満がいるのを想像すると、笑顔が隠しきれなくなった。満はいつものようにおどけた調子で、駅の方の女子高制服姿でスカートを見せびらかすのだろう。部屋で赤面し、急にしおらしくなってしまった満を知っているのは、私だけだ。